

一人旅の勧め

高崎経済大学経済学部教授 ◎ 岡村 晃子

“一人であること、未熟であること これが私の20歳の原点である” こう始まる“20歳の原点”という本を今読む学生さんはどれくらいいるのでしょうか？これは高野悦子という一人の女子大生が駆け抜けた短い人生の愛と死の日記で、もうずっと昔まだ日本に学生紛争なるものがあった頃の話です。時代は違っても大人になる難しさ、一人の孤独さを考え、なんでここにいるのだろうという疑問に答えようとして格闘した記録として何度か読み直しました。彼女の文章を読むと比較的恵まれた家庭で育った、聡明な、また色々な面で有能な女子大生の姿が浮かび上がってきます。

外から見たら多分、優等生のイメージを持った人です。しかしその彼女の悲痛な孤独の叫びがそう思うのは自分だけではないんだという救いの言葉のように思えました。私も孤独で、未熟、でも大人として自分の足で立って生きたいと思っていました。

私は彼女ほど考えるタイプではなかったのでしょうか。結局死に直面しないで、旅に出ることにしました。大学3年の春休みに1ヶ月半かけてヨーロッパをリュックを背負って一人旅することにしました。多分これが私に出来る唯一の日常からの離脱、独りになること、大人への1歩を踏み出すことだったのだと思います。高校時代に世界史の中でしか知らないヨーロッパはなんといいえ魅力的な地でした。またヨーロッパはアフリカや東南アジア、南アメリカより女の子が一人でも旅行できそうな安全さがあるとも思いました。旅費は夏休みにアルバイトでためました。イギリス、ベルギー、ドイツ、スイス、オーストリア、スペイン、フランスと回りました。思い出をたどっていったらきりがありません。

何で一人旅？と旅に出る前も、旅に出てからも聞か

れました。“2人のほうが安全だし、感動を共有できるじゃあない。”ともいわれました。私としては2人だとどうしても2人で日本語で話すことが多く、現地の言葉を聴き、その土地の人とかかわりを持つには1人のほうがよいと思いました。まあ目的が独りになることだったので1人旅となったわけですが…コミュニケーションは大変ですが、片言の英語でも何とかなるものだと思います。

怖い目にあわなかった？とも聞かれました。確かに変な人はたくさんいました。ただおいしい話はないんだということ、夜遅くに街中を目的もなく歩かないことさえ分かっていたら防げることがほとんどでした。

感動したことは？答えるのに難しいことですが、社会の成り立ち、公共の施設の考え方に対して国によって違いがあるんだなあと思いました。

社会の成り立ちの例のひとつは切符を改札でチェックする国としない国があることです。しない場合は電車、地下鉄、バスの中でチェックします。ただこの場合、必ずしも毎回検札が来ないのでただ乗りも可能なわけです。どのくらい不正乗車をしてる人がいるのかわかりませんが、それでも社会はちゃんと動いているという感じでした。イギリスは改札でチェックする国で、日本に近い印象を受けましたが、ヨーロッパ大陸のほとんどの国はチェックがありませんでした。人間を管理する仕方に違いがあるんだなあ…と思ったんです。良い、悪いではなく別の発想があるということを感じました。

もう一つの例は、公共の福祉を誰にあってはめるかということについてです。ロンドンの国立の博物館、美術館は全て無料でした。(今でも無料です！)これはすごいことだと思います。税金を全く払っていない外国人にまで国家の遺産を無料で提供するとは他の国ではめったにないことだと思います。大英帝国の遺産なののでしょうか。誰にでも分け隔てなく同じサービスを提供するというイギリスの公共の福祉への考え方の1例だと思います。

たった1ヶ月半の旅でしたが、別の考え方、別の人生を見た気がします。又一人でもなんとかなるという自信が生まれました。

新入生の皆さん、特に親元を離れて一人暮らしを始めた方、最初は大変です。色々なことがあると思います。大切なのはそう思っているのは皆さんだけではないということです。大変なとき、その気持ちを受け止めてくれる人又はもの、例えば本とか趣味とかをみつけることが大切です。

皆さんが実り多い大学生活を送られることを祈っております。

